



「ん~~~~っ！キレイな所だな、来てよかった。」



——アイシヤは友人でフォトグラファーのフィアに水着のモデルを依頼され海に来ていた。——

アイシヤは海に色々と思い出が無く、出来れば行きたくない場所ではあつたのだが、

依頼を受けた後に場所を確認してしまつた為、嫌とは言い出せず、自業自得と諦めたのだが、訪れた海は想像以上に綺麗な所だつた。

撮影自体もスタッフの配慮が行き届いており、アイシヤは終始気持ちよくノリノリで撮影する事が出来た。

そのおかげか予想より早く昼間の撮影が終わり、次に予定されていた夜の撮影までの時間が大分空いてしまう事になった。

その間は用意していたコテージで時間まで好きに過ごして待っていて欲しいと言われたアイシヤはくつろぐ前にシャワーを浴びる事にした……。

「ふふふ〜♪、今の所悪い事も起きてないし、
そう何度も酷い目に合うわけないよね〜。」

そう言いながら、
シャワーを出そうとした時である。

「ん？」

壁面のタイルが何かゼリ？
の様なもので覆われていた。

コテージの中はどこもキレイに清掃されており、

—何だろうこれ？—

と不思議に思い確認の為
アイシヤは壁面に触れようとする——。



「……ツケタ、……みつけた……」

「何っ？」

どこからともなく聞こえた声に咄嗟に警戒し
身構えようとしたアイシヤだが、

触れようとした壁面のスライムに腕を捕らえられてしまう、
そしてその隙を突くように他のスライムが
アイシヤの肢体に一齐に絡みついてゆく――





「っ、あ、これ……は……っ？」

じゅる…

ぐんぐん…

ぐちゃぐちゃ…

ぐちゃぐちゃ…

「…ん…ア、タ…や…ん…」

「!? まさか……このスライム……っ？」

昨年アイシャはある実験に協力したのだが、
その実験の最中に使用されたスライムが暴走し、
酷い目にあわされた事があった……。

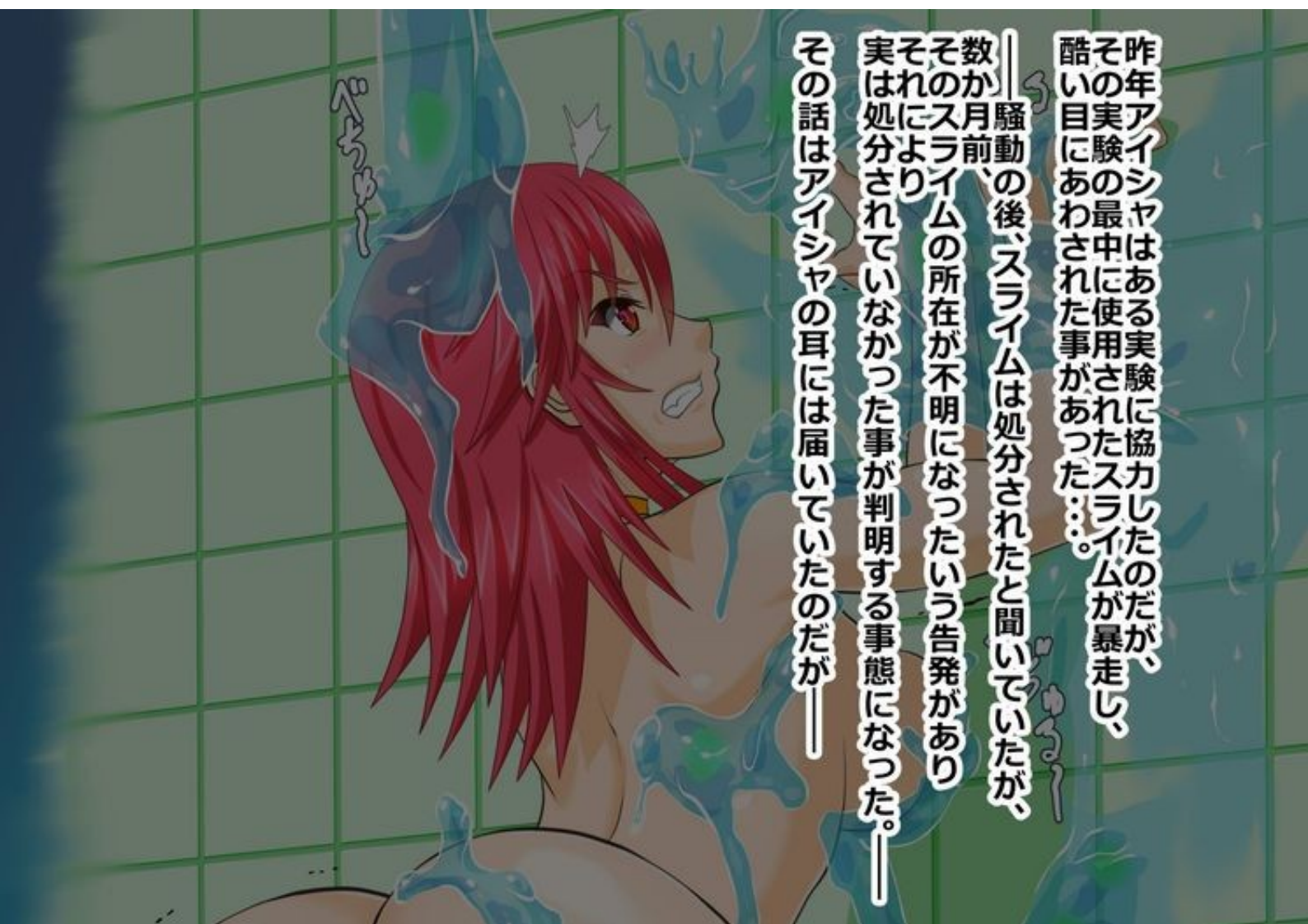
騒動の後、スライムは処分されたと聞いていたが、

数か月前、スライムの所在が不明になったという告発があり

それにより、実は処分されていなかった事が判明する事態になった。

その話はアイシャの耳には届いていたのだが――

ぐちゃぐちゃ



「……」

じゅる…

ぐんぐん…

くちゅくちゅ

べゅべゅ

（前よりも力が強くなってて抜け出せない…、
…言葉を話せるスライムって…、
しかも私を狙ってきてる？）



「…私に、何か用かな？」

「あなた…マエにあった…
アナタ…オイシイ…
…ボク…？…わたし？
…アナタのこと…スキ…？」

「…？…なんか、思考が支離滅裂？…
…ちよつと仕掛けてみるか」

「ねえ？
私あなたみたいなのに初めて会うんだけど、
人違いじゃない？」



「……え？……？……？……？……？……？……？……？……？……？」

（よし、やっぱり混乱してる！、今なら……）

アイシャは首のチョーカーにエネルギーを送る。

——このチョーカーは今回衣装とは別に用意された

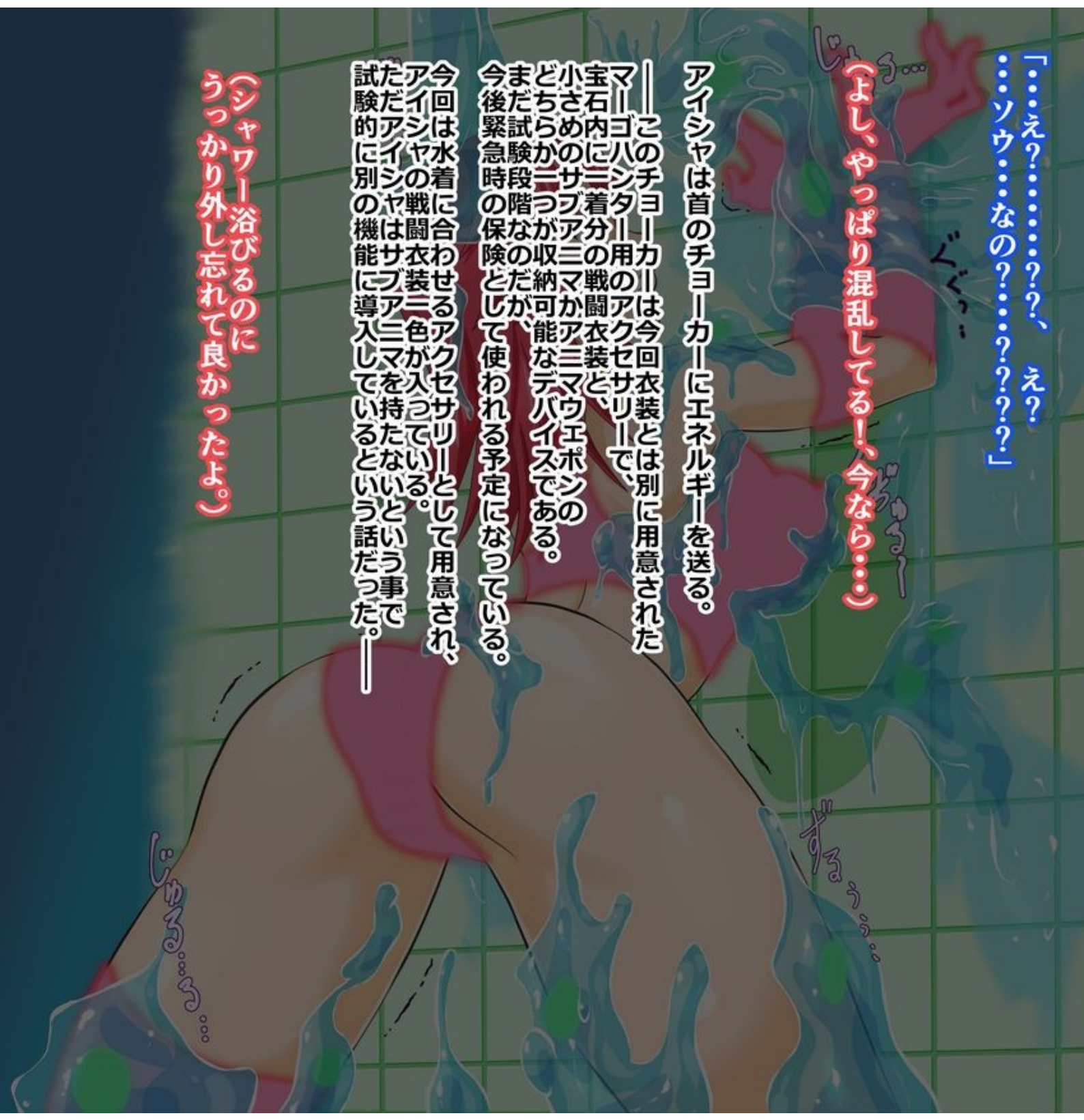
宝石の収納可能なデバイスである。

まだ試験段階の保険として使われる予定になっている。

今回は水の着に合わせるアクセサリーとして用意され、

試験的に別の機能に導入しているという話だった。

（シャワー浴びるのにうっかり外し忘れて良かったよ。）



「じゃあ……フツウニ

たべる……」





——それから約1時間——

スライムはアイシヤの肢体の隅々に絡みつき、体液を舐めまわし、味わう。

実はあの騒動以来、アイシヤはスライム型のマーゴ対策を考えていたのだが、スライムの内部の玉状の生物が予想外で問題だった。

——玉型の生物は元々マーゴが生まれ出すトラップとして生まれ出されるも利用される事の無かった出来損ないだった。

本来捨てられそのまま死を迎える筈だったが、偶然出会ったスライムに取り込まれ、その内部で生き続ける事ができた。それから生物はスライムから栄養を供給され、変わりにスライムの獲物の捕獲を助けるという共生関係にあった——。

生物は淫気を多量に含んだ電撃を発する能力を持ち捕らえた相手に電撃を流し無力化する。

アイシヤはその強烈な痺れを伴う快感電撃を体の内と外から浴びせられ続け、抵抗力を削がれ続けていた——。



ひび ひび

ズボッ
ズボッ

ズボッ
ズボッ
ズボッ

バキッ!

ズボッ

バキッ!

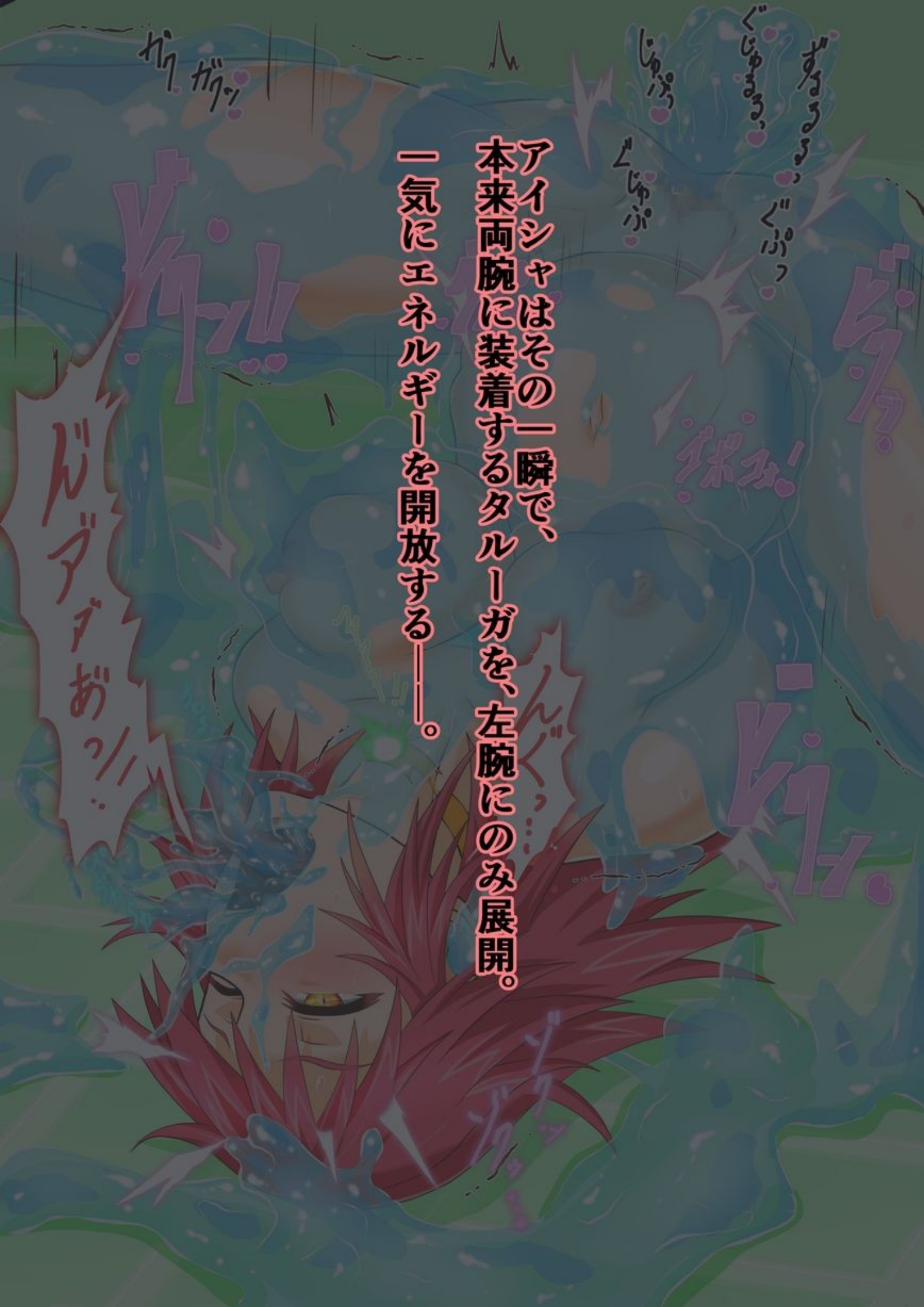
ズボッ!

アッ...

バキッ!

ズボッ...

ズボッ...



アイシヤはその一瞬で、
本来両腕に装着するタルーガを、左腕にのみ展開。
一気にエネルギーを開放する——。

ドゥアアアッ!!

ドゥア!

ドゥアッ!!

ガッガッ

ガッガッ

ガッガッ

ガッガッ

「ねえ？…オシエテ…おし…！…aaagguaii
あっせっ！…ア…ツ…ああああ！」

アイシヤはアニマウエポンで生み出したエネルギーを自身の体内から放出する。タルーガを片腕だけ展開したのは、万が一の展開失敗を防ぐ為。

本来一對のアニマウエポンを半分しか展開しない状態ではアニマウエポンから作り出されるマーゴを減ぼす力も半分になってしまう。しかしクラス5のマーゴハンターであるアイシヤの攻撃力は半減したとしても十分な威力を誇り――。

「おおおお……オジ……アア……na……Zg……g……」

スライムが事態に気づくまでの数秒でアイシヤの体内にいた玉状生物は全て消滅し、次いでスライムもボコボコと沸騰しながら消滅していく……。

——アイシヤのエネルギーの属性は熱であり、体内のスライムがいくら熱せられようと、その熱はアイシヤが生み出したものなのでダメージ等は一切ない。——

そして、程無くして浴室内の全てのスライムは消滅していった——。



「えほっ！けほっ！

うう…くそう…またあたしの海の思い出が…」

——まさかこんな場所にあのスライムが現れるとは……

幸いマーゴと同じ処理方法が有効で助かったが——

「まあ、でも……」

「一般人が襲われなかったから

いいっか。」

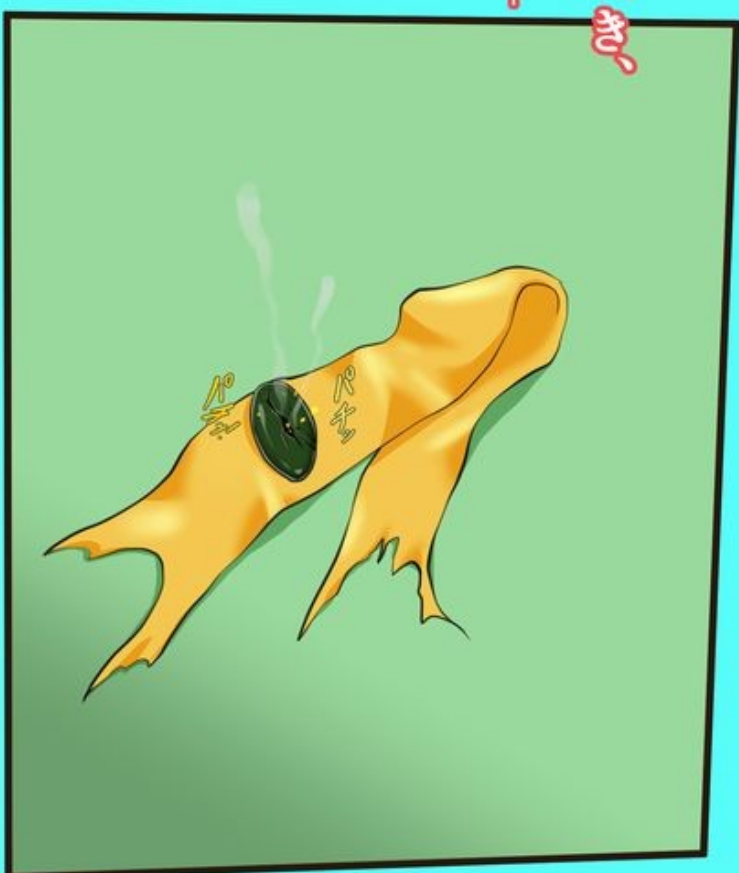


そんな事を呟きながらアイシャはちぎれて落ちたチョーカーを見る、
宝石部分を見るとひび割れ煙を吹いている、

今回はこのチョーカーがなければおそらく無事では済まなかった。
アイシャは心の中で、

——これは一刻も早く実用化されるべき、
販売じやなくて
皆に支給してほしいくらい便利！

と、推しまくろうと心に誓う。



「さてと、出来ればこのまま一眠りしたいけど、
そうもいかないよね……」

そういいながらヨロヨロと立ち上がると、
私物として持ち込んだアタッシュケースを開く、

開くと同時に中のデバイスが起動状態になり操作画面が立ち上がる、
画面をいくつか操作すると、
中から60cmぐらいの長細い卵状の物体が3機浮遊し、
室内をスキャンし始める。



——この「シールド」というデバイスはマーゴハンターが現地野営等をする際に周囲のマーゴや敵を警戒してくれられるデバイスで、ドローンのように浮遊しつつ周囲を探索、マーゴや敵を発見した際には内臓されている60機の小型ドローンが突撃し攻撃する。

マーゴ相手であればミサイルのように自爆攻撃を行い、下級マーゴ位なら倒す事も出来る便利なデバイスである——

このシールドはデバイス関連に明るいカルミアが調整したものなので間違いなく既製品よりも性能が高くなっており、少なくともアイシヤが回復するまでの時間は安心して過ごせるだろう。

昨晩の大騒ぎの件があったにも関わらず、自分の事を思っただけの物を持たしてくれた相棒の事を思うと、

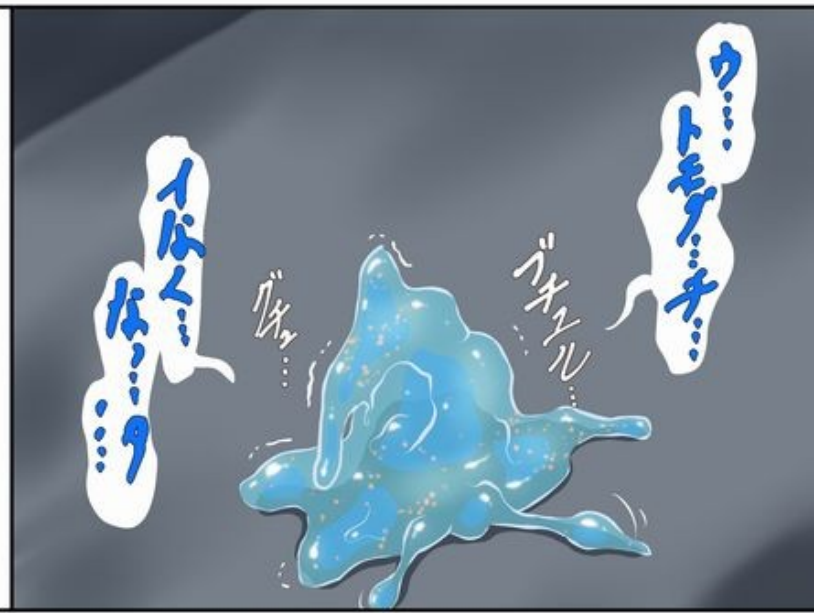
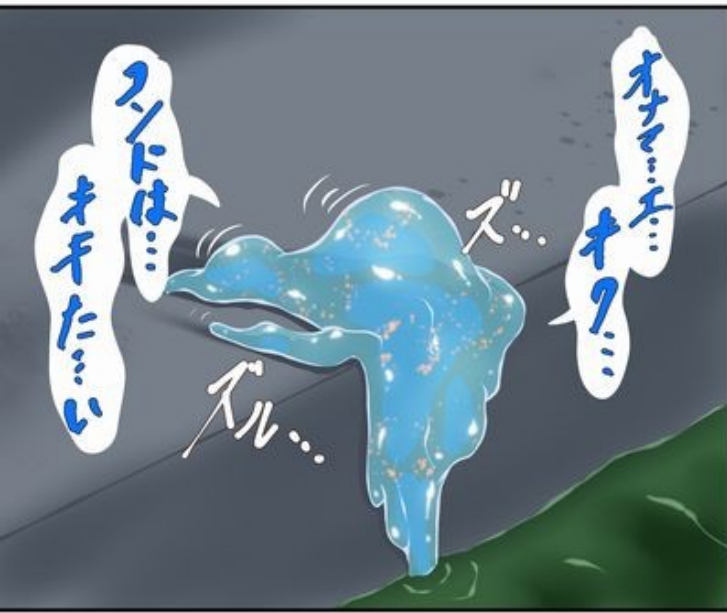
ちよつと罪悪感を覚えたアイシヤは——。

「……うん、しょうがない、後で何枚か送るか……」

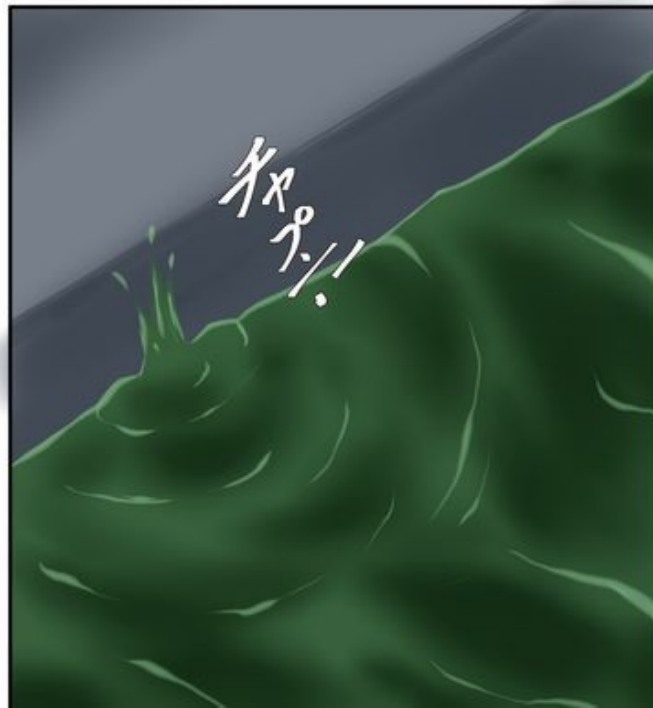
アイシャの水着姿が見たい見たいと駄々をこねていた彼女に後で何枚か撮影中の写真を送ってあげようと思いついたが、まずは今も撮影準備をしているフィアとスタッフに連絡し、状況説明と注意喚起をした。

それが終わった後は警戒しつつ、今度こそしっかりと熱いシャワーを浴び、疲労回復の為にベッドに潜り込む。

幸い、その後の撮影は問題無く行われ、アイシャはは多少の災難に見舞われながらも、海を後にしたのだった――。



to be...
next year?



...こんどこそ...聞く...